慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	和蘭事始と蘭學事始 : 福澤家所藏の一寫本について
Sub Title	On a MS. of "Rangaku Kotohajime" (The early history of European science in Japan)
Author	富田, 正文(Tomita, Masafumi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1950
Jtitle	史学 Vol.24, No.2/3 (1950. 10) ,p.159(291)- 177(309)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	福澤諭吉五十年忌記念
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19501000-0159

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

和蘭事始と蘭學事始

―福澤家所藏の一寫本について―

富田正文

はしがき

昭和二十四年秋、福澤家から慶應義塾に寄託された福澤諭吉關係遺物約一千六百點の中には、研究家にとつて珍重すべき幾多の資料が含まれてゐる。それらは追々に整理の進められるに從つて報告されるであらうが、茲に私の報告しようとする「蘭學事始」寫本もその一つである。

「蘭學事始」は我國に西洋文化の傳來した經緯を明かにする極めて貴重な文獻として、その史料的價値を認められてゐるが、近年これに關する研究が漸く精密となり、記事の誤りや不正確な點なども次第に明かにされて來たけれども、尙ほ幾多の疑問が未解決のまゝに殘されてゐる。

固よりこの拙稿はこれらの疑問の解明を試みようとするものではないが、これによつてその解明への一つの手懸りともならば、望外の幸と思ふ次第である。

「蘭學事始」出版の事情

「蘭學事始」は、江戸蘭學の創始者の一人である杉田玄白が、文化十二年（一八一五）八十三歳のとき自から筆を執つて、斯學の先達前野良澤を中心として一群の篤學の士がオランダ語の解剖書の翻譯に從事した經緯を中心として、その前後に於ける我國の西洋文化攝取の事情、蘭學興隆の機運を、つぶさに敍べたもので、單なる歷史上の事實を記したといふだけでなく、筆者の學問への燃ゆるやうな情熱が紙上に陰々たる聲を放つて、百年の後もなほ讀者をして感奮興起せしめる名著である。

此の名著が、初めて出版せられて廣く一般の人々の眼に觸れることゝなつたのは、實に執筆後五十數年を經過した明治二年のことであつた。そしてその出版に與つて大きな功績のあつたのは福澤諭吉である。事の經緯は、明治二十三年再版の序文に福澤みづから左の如く記してゐる。

「蘭學事始」の原稿は、素より杉田家に一本を祕藏せしに、安政二年江戸大地震の火災に燒失して、醫友又門下生の中にも曾て之を謄寫せし者なく、千載の遺憾として唯不幸を嘆ずるのみなりしが、舊幕府の末年に、神田孝平氏が府下本郷通を散歩の折節、偶ま聖堂裏の露店に最と古びたる寫本のあるを認め、手に取りて見れば紛れもなき「蘭學事始」にして、然かも鵠齋先生の親筆に係り、門人大槻磐水先生に贈りたるものなり。神田氏の雀躍想見る可し。直に事の次第を學友同志輩に語り、孰れも皆先を爭ふて寫取り、俄に數本の「蘭學事始」を得たる其趣は、既に世に亡き人と思ひし朋友の再生に遭ふたるが如し。而して之を再生せしめたる恩人は神田氏にして、我輩の共

に永く忘れざる所なり。（中略）斯くて一兩年を過ぎ、世は王政維新の變亂と爲り、都下の學友輩も諸方に散じて、東西南北唯兵馬の沙汰を聞くのみ。此時に當り、迂老は江戸に住居し、獨り目下の有樣を見聞して我國文運の命脈甚だ覺束なしと思ひ、明治元年のことなり、月日は忘れたり、小川町なる杉田廉卿氏の宅を訪ひ、天下騷然復た文を語る者なし、然るに君が家の「蘭學事始」は我輩學者社會の寶書なり、今是を失ふては後世子孫我洋學の歷史を知るに由なく、且は先人の千辛萬苦して我々後進の爲めにせられたる其偉業鴻恩を空ふするものなり、就ては方今の騷亂中に此書を出版したりとて見る者もなかる可しと雖も、一度び木に上するときは保存の道これより安全なるべし、實に心細き時勢なれば、賣弘などは出來ざるものと覺悟して出版然る可し、其費用の如きは、迂老が斯道の爲め又先人へ報恩の爲めに資く可しとて、持參したる數圓金を出し懇談に及びしかば、主人も迂老の志を悅び、いよ〳〵上木と決し、其頃は原より活版とてはなく、先づ草稿を校正して版下に廻はし、櫻の版に彫刻することなれば、彼れ是れ手間取り、發兌は翌明治二年正月のことなりき。即ち今の版本「蘭學事始」上下二卷是れなり。（下略）

初版は半紙判木版刷上下二卷、上卷の表紙見返しには

明治二年己巳新刻

蘭學事始

天眞樓藏版 天眞樓記

とあり、第一丁表に石川大浪の筆に成る「鵠齋杉田先生肖像」が掲げられ、次に杉田玄端の識語を附した大槻磐水の筆

に成る「杉田先生略傳」と杉田廉卿撰の「蘭學事始序」とが載せてあり、これに續いて本文二十九丁、下卷は本文のみ二十六丁で奥付もない。

再版は日本醫學會が第一回總會の記念として出版したもので、初版本の內容の外に、福澤の序文と、長與專齋の近世醫事沿革とが新たに加へられ、菊判西洋紙兩面活版刷で、初版本の誤りが僅かに訂正されてゐるのみである。

その後、文明源流叢書や杏林叢書などにも載せられたが、昭和五年野上豐一郎博士の校註により岩波文庫本として出版され度々版を重ねて大に普及し、昭和十六年には緒方富雄博士により築地書店からその現代語譯が出版せられた。これらの諸書はいづれも前記明治二年の初版本に據つたものである。

「蘭學事始」に關する問題の所在

さて以上のやうに「蘭學事始」が普及しその史料的價値が大きく評價されて來るにつれて、此の書に關する研究が盛んとなり、檢討が精緻になればなるほど、いろ／＼な問題が起つて來た。

第一に、再版序に記した福澤の記述が果して正確であるかどうかといふ問題。

序には、前記の通り、此の書は杉田家に一本があつたが、安政二年の大地震で失はれ、「醫友又門下生の中にも曾て之を謄寫せし者なく」斯道の學者は皆これを痛惜してゐたと記してあるが、近年に至つて各種の古寫本が發見され、しかもそれらが皆、明治二年初版本刊行以前の寫本と覺しく、「曾て之を謄寫せし者なく」といふ記述は事實によつて覆へされた。

更に神田孝平が湯島聖堂裏の露店で發見した寫本は「紛れもなき『蘭學事始』にして、然かも鵠齋先生の親筆に係り、門人大槻磐水先生に贈りたるもの」であるといふが、明治二年初版本と、その後に發見された各種の古寫本とを比較校合すると、傳寫の間に生じたと思はれる誤記脱落が尠なからず見出され、しかも初版本よりもそれらの古寫本の方がその點に於て優れてゐるものが多いので、果して神田の發見した一本が杉田玄白の親筆であるかどうか疑問とせざるを得ない。しかも福澤はこれを杉田の親筆と斷定した根據を示してゐない。この點に關する疑問。

いよ〳〵出版の運びとなつたとき、「先づ草稿を校正して版下に廻はし」たといふが、この校正は果して神田の發見した寫本の通りに校合したのか、それとも校正者の見解で適宜に字句送り假名の加除を行つたかどうかといふ問題。

福澤の序文の記述についてだけでも、以上のやうな疑問がある。

第二に大きな問題は「蘭學事始」といふ書名は誰が名付けたかといふ疑問。

明治二年初版本刊行以前に作られたと推定せられる數種の古寫本には、一つとして「蘭學事始」と題したものはないのである。內山孝一博士に據れば、今日までに知られてゐる古寫本は五種類ある。卽ち、明治二十八年に富士川游博士が佐倉の順天堂佐藤家の藏本中から發見した「蘭東事始」。東北大學教授であつた故村岡典嗣博士舊藏にかゝる「蘭東事始」。岩崎克巳氏によつて報告せられた理學博士矢野宗幹氏所藏の「蘭東事始」。原田謙太郎博士の報告した小石元俊の子孫小石暢太郎氏所藏の「蘭東事始」。それから內山博士が精密な研究報告を行つた石原明氏發見の「和蘭事始」。これらの寫本はいづれも「蘭學事始」初版本以前の書寫にかゝるものと推定せられ、しかもいづれも初版本に比し內容的に優れてゐると報告せられてゐる。

然らば「蘭學事始」といふ書名は、初版本刊行以前にはなかつたかといふと、岩崎氏の報告では江戸時代の著作目錄や人物誌などには全く見當らぬといふ。僅かに大槻玄澤の文化十三年に書いた「蘭譯梯航」の中に、「蘭學事始」といふのが見當るだけである。

だから、この書の原名は「蘭東事始」であつて、「蘭學事始」といふのは後人が勝手につけたのではないかといふ疑問が起つてゐたのであるが、內山氏の「和蘭事始」の發見によつて、問題は三ツ巴に紛糾して來たのである。

更に明治二年初版本に識語を記してゐる杉田玄端自筆の遺稿に醫家全書第六編卷之二といふのがあつて、その草稿は、版心の柱の上部に和蘭事始、下部に天眞樓藏と印刷され、輪廓だけ劃されてゐる雁皮紙に記されてあり、これを見た「中川淳菴先生」の著者和田信二郎氏は、これに强い疑問を懷き、これを一種の謎であるとし、或は「蘭學事始」初版の印刷を企てたとき、「蘭學」の文字を「和蘭」と改める積りで用紙を作つたが、やはり初めのまゝ「蘭學事始」の方がよいといふことになつたので、その用紙は不用に歸し、これを原稿用紙に使つたのではないかといつてゐる。內山博士はこれに就て、板心だけ印刷しておいて、後で本文を刷るといふのはおかしい、殊に木版では本文と同一版木に彫刻されるのだから、用紙だけ別に作られてゐるといふのは、やはり一種の謎である、或は杉田家にそれより以前から此の用紙があつたのではあるまいかといつてゐる。

「蘭學事始」成立に就て、主として文獻學的に問題にされてゐるのは、大體以上のやうな諸點である。

これらの問題のうちの二三のものは、神田孝平の發見した寫本か、初版本の底本となつた原稿かゞ出て來れば、解決できるものである。そこで、神田家、杉田家、福澤家あたりの所藏文獻の搜索が重要な意義を帶びて來る。

福澤家所藏の寫本

ところが、今度福澤家から慶應義塾に寄託された福澤諭吉遺物の中から、一冊の「蘭學事始」の寫本が出て來た。しかも此の寫本は「和蘭事始」と「蘭學事始」との關係を解くに一つの重要な資料となるものである。

この寫本は、半紙判、茶色絹糸で和綴にし、白地に銀色の唐草模様を箔押しにした襖紙のやうな貼合せの厚表紙をつけ、左上端に題箋が貼つてある。題箋は子持罫で圍つた中に楷書で「和蘭事始　上下」と記し、その「和」の字を墨で輕く〇を書いて消し、「蘭」と「事」との間に小さく黒點を施し、その點の右側に「學」といふ字を書き入れてある。

表紙の見返しは雁皮紙で、白地に罫なしで、

明治二年新刻

和　蘭　事　始

天眞樓藏版

と記し、その「和」の字に墨で〇をかけて消し、「蘭」と「事」との間に く のしるしを入れて、その右傍に小さく「學」と書き入れてある。

第一枚目も表紙見返しと同質の雁皮紙で、明治二年の初版本に載つてゐる杉田廉卿撰の序文が、楷書で漢字片假名まじりに記されてある。しかもその表題は、題箋や見返しと同樣に「和蘭事始序」と記して、「和」の字を消して「學」

の字を書き入れてある。

本文は、楮半紙、無界二十三行、達筆な細字で漢字平假名交りに記されてゐる。その第一行目は「和蘭事始上之卷杉田翼玄白述」とあり、その「和」を消して「學」の字を挿入してゐること前と同樣である。

見返しと第一枚目の序文とが雁皮紙で、本文の用紙と相違してゐる點、書體の異なる點、虫喰ひの跡などから察すると、本文の寫本が先に出來て、これに見返しと序文とを後からつけて一冊に綴つたものと思はれる。從つてこの寫本は明治二年の刊記が記してあるにも拘らず、本文はそれより以前に、見返しや序文とは關係なく作られたものと察せられる。又その筆跡は本文も序文も題箋も見返しも福澤以外の人の手に成つたものと思はれる。

本文は十二枚で、その十二枚目は表半丁だけで終つてゐるので、裏はそのまゝ裏表紙に貼りつけてある。六枚目裏十三行で上卷は終り、十四行目に「和蘭事始上卷　竟」と記し、一行あけて次の行に「和蘭事始下之卷」と書き起し、次行から版本と同樣に「此會業怠らずして云々」の條が書き續けられ、最後の十二枚目表は七行で終り、間をあけて左端に「和蘭事始下之卷終」と記されてある。

「和蘭事始」といふ表題を「蘭學事始」と訂正したのは、題箋、見返し、序文、本文第一行の四箇所いづれも福澤諭吉の筆跡で、それ以後の三箇所は訂正を施されてゐない。

本文は見事な細字で、漢字は小楷體または行書、假名は變體假名がかなりに多い。所々に誤寫又は脫字を朱筆で訂正してゐるが、この朱筆は本文の筆跡と同一と思はれる。

上段欄外に數箇所の書き入れがあるが、寫本の筆者と同一筆跡と見られるのは一箇所だけ、他はすべて福澤の筆跡で

ある。（いま流布本と對照する便宜上、岩波文庫本昭和二十年十一月第十六刷の頁數と行數とで書き入れの箇所を示す。）

岩波文庫40頁10行目（以下40・10と記す）「一とせ甲比丹は「ヤン・カランス」、外科は「バブル」といふもの來りし事あり」とある所の上段に

「和蘭官名表を案ずるに

「ヤンカラス」は千七百六十六年卽ち我明和三年に一年在留し後一年を隔て千七百六十八年に再び來りて二年間在留す卽ち我明和五六の二年也恪考」

と記してある。

これだけが本文の筆跡と同一のもの。以下はすべて福澤の筆跡である。

〔48・5〕「此春其書の手に入りしは」云々と始めてターヘル・アナトミアを手に入れたことを記してあるところに、

「此春ハ明和八年ノ春ナリ

解剖ハ三月四日」

〔53・4〕腑分の歸途に良澤、玄白、淳庵等が蘭書の精密に驚嘆してこれを讀破しようとの志を立てる條に

「讀書發會明和八年卯三月五日」

〔54・8〕いよ〳〵前野良澤の宅に集つてターヘル・アナトミアの書を開いたところの一節に

「良澤ノ宅ハ鐵砲洲奥平中屋敷」

欄外の書き入れはこれだけであるが、最後の本文の餘白に

「是ハ文化十二年ノ記ナラン先生三十九歳ニ讀書ニ志シタルハ明和八年ナリ　諭吉記」

と書き入れがしてある。

以上で、福澤本「和蘭事始―蘭學事始」の外觀は大要紹介し得たと思ふが、本文の内容はどうであるかといへば、明治二年初版本の内容と比較すると、此の寫本の方がやはり優れてゐる。しかし内山博士の報告する「和蘭事始」の内容に比してはやゝ見劣りがする。茲に内山博士が流布本と「和蘭事始」との間の重要な差異として擧げてゐる數點に就て、福澤本を檢討してみよう。（やはり岩波文庫本で頁と行とを示す。）

〔27・5〕「漢學ハ遣唐使といふものを異朝へ遣はされ」が、内山本では「漢學ハ中古ニ遣唐使といふ者を異朝へ遣され」となつてゐる。その「中古ニ」とある方がはつきりするのはいふまでもないが、福澤本は此の三字が「中古シ」となつてゐる。「シ」は「ニ」の誤寫であらう。

〔27・7〕「此蘭學ハ左樣の事にも非ず」が、内山本では「此蘭學ばかりは左樣の事にもあらず」となつてゐる。福澤本では「ばかり」の三字は流布本と同樣に缺けてゐる。

〔28・2〕「陽にハ交易陰にハ欲する所有てなるべし」内山本「陽にハ交易によせ陰には欲する所ありてなるべし」福澤本には「によせ」の三字が流布本と同樣に缺けてゐる。

〔29・4〕「此南蠻阿蘭陀兩流を相兼しとて」内山本「此人」と「人」の字がある。福澤本は流布本に同じ。

〔30・7〕「吉田流楢林流なと云るハ」内山本「吉田流楢林流などいへる流義ハ」福澤本は内山本に同じ。

〔36・8〕「學び識れる所をバ聞書せりとなり」内山本「聞盡せりとなり」福澤本は内山本に同じ。

〔39・7〕「容易に調得し難し」内山本「納得」福澤本は内山本に同じ。

〔47・7〕「願も望の如く」内山本「願も叶ひ望のごとく」福澤本は内山本に同じ。

〔48・9〕「此男に從ひ行て」内山本「此男從ひ行て」福澤本は流布本に同じ。この「に」の字は有ると無いとで主客が逆になる重要な一字で、此の場合内山本の方が正しいと解せられる。

〔51・7〕「これハ腎なりと切り分け示せり」内山本「これは肝也腎なりと切りわけ示せりと也」福澤本「これハ肝なり腎なりと切りわけ示せりとなり」

〔56・5〕「木の枝を斷ちたる迹其迹」内山本「木の枝を斷チ去れバ其跡」福澤本は内山本に同じ。

〔59・4〕「東西千古の差ひあることを知り明らめ」は寫本の際、數文字を脱落したものゝ如く、内山本には「東西千古の差へあることを知りしに驚き心服し何とぞ此一事早く知り明らめ」とある。福澤本は流布本と同様に脱落のままである。

〔64・11〕「思憲」内山本の「思慮」の方がよいことは勿論であるが、福澤本も流布本と同様である。

〔66・11〕「抑躍」これも内山本の「抃躍」がよい。福澤本は流布本に同じ。

〔77・1〕「門人玄澤に託したれハ玄澤彼國文二十五字より」は、内山本の「門人玄澤に寄託す故に此男を同人に入門せしむ玄澤彼國文廿五字より」の方が正しいであらうことは勿論であるが、福澤本は此の點は最もひどく「門人玄澤彼國文廿五字より」と二つの「玄澤」の間を全然脱落してゐる。

〔77・7〕「卽世」內山本「早世」福澤本は流布本に同じ。
〔78・10〕「其始め石井へ介をなし」內山本「其始玄澤が石井へ介を爲し」福澤本は內山本に同じ。
なほ仔細に假名と漢字の相違や送り假名の有無などを比較すると、流布本と內山本と福澤本との間の相違は殆んど無數といつてよい。

福澤本による考察

福澤本の外觀內容は凡そ以上のやうなものである。そこで私は此の寫本と明治二年の初版本との關係、それから今までに報告されてゐる各種の異本との關係を考へてみたい。

第一に神田孝平が聖堂裏で發見した古寫本は、果して「紛れもなき蘭學事始」であつたかどうか。

福澤本が前記のやうな見返しや序文を伴つてゐるところを見れば、明かにこれが初版本の典據となつたものであることを示してゐるが、その表題が最初は「和蘭事始」と記されてあつたのを、福澤の筆で「蘭學事始」と訂正されてゐる事實は何を物語るか。

私は神田孝平の發見した寫本も「和蘭事始」といふ表題であつたのではなからうかと想像する。そして其表題のまゝで學友の間に爭つて數種の寫本が作られて讀まれてゐたのを、明治二年に至りいよ〳〵上木彫刻といふ間際になつて急に「蘭學事始」といふ表題に變更されたのではなからうかと思ふ。しかも福澤が杉田廉卿を訪問してその出版をすゝめたときは、まだ「和蘭事始」といふ題名のまゝであつたが、杉田の序文も出來、原稿の下校正も濟み、いよ〳〵版下の

原稿にかゝらうとしたときに至つて、俄かに「蘭學事始」といふ題名の方が適切だといふので變更されたものではなからうか。しかも其の題名變更は福澤によつて發議されたものではなかつたらうか。これは固より私の想像に過ぎないが、私をして斯く想像せしめるのには少しく理由がある。

それは福澤本が、明治二年の初版本にほゞ近い體裁を具へてゐる寫本であつて、しかも福澤自身の筆で表題に訂正が加えられてゐる點、それから前記和田信二郎氏著「中川淳菴先生」に、杉田家に「和蘭事始　天眞樓藏」と版心に彫つた雁皮紙原稿用紙のあつた事實が記されてゐる點などからである。

杉田家では恐らく福澤からの好意ある申出により、直ちに上木の準備に着手したのではあるまいか。周圍の罫枠が施してあつて版心の柱に書名と藏版者名が彫つてあるのは、版下用の原稿用紙と私は想像する。内山氏のいふやうに木版は本文と版心とを同一版木に彫刻するのではあるが、一枚ごとに版心の原稿を書いてゐたのでは、多數の中にどうしても狂ひが生ずるので、先づ版心と周圍の界だけを一枚の版木に彫つて、これで版下用原稿用紙を印刷し、版下書きはこの紙に淨書するのである。杉田家の原稿用紙は雁皮紙であるといふが、雁皮紙は墨のにじみがなくて版下用には最も適當な紙である。内山氏の疑問はこれで解決すると思ふ。杉田家ではこの原稿用紙を作つていよ〳〵版下書きに着手させようとしたときに、急に表題が變更になつたので、その原稿用紙が無駄になつてしまつたため、玄端がこれを自著の原稿紙に流用したのであらうと思ふ。私の解釋は此の點で和田氏の解釋と丁度順序が反對になるわけである。

「和蘭事始」よりも「蘭學事始」といふ表題の方がこの書の内容に適切であることは、内山博士も指摘してゐる通りであるが、假りに福澤が「和蘭事始」を上木に當つて「蘭學事始」と訂正したとしても、その訂正が單に福澤の思ひ付

きでなされたものとは思はれない。內山博士は數種の異本や岩崎氏その他の研究を比較援用して、此の書が執筆の當初は無題であつたもので、後に「蘭東事始」といふ題名にきまり、その間に「天眞樓漫筆」とか「蘭學事始」とか「和蘭事始」とか色々の呼稱が行はれ、明治二年の初版本に至つて「蘭學事始」といふ題名に一定したのであらうと論じてゐるが、恐らくは安政の地震以後、神田の寫本發見までの間、書名だけが傳へられて「蘭學事始」といふ名で洋學者の間に噂されてゐたのではあるまいか。或は「蘭學の起原沿革を記した文書」ぐらゐの呼び方で傳はつてゐたか。いづれにしても「蘭東事始」といふ凝つた名や「和蘭事始」といふやうな呼び方は、實物を見なくては一寸思ひつかぬ題名であると思ふ。

次に神田の發見した寫本が「鵲齋先生の親筆に係り門人大槻磐水先生に贈りたるもの」であつたかどうか。私はこれは福澤の思ひ違ひではなかつたかと想像する。少くとも福澤家所藏の寫本が、神田の發見した原本から轉寫したものとすれば、轉寫の際の誤脫を本文と同一筆跡の朱筆で校合訂正してゐるところから見て、前記のやうな異本との相違は、既に神田の原本に存在したものと思はなくてはならないからである。福澤が再版序を書いたのは初版刊行後二十年以上を過ぎてゐる。記憶も曖昧になつてゐたらうと思ふのは、再版の序を求められたとき長與專齋に贈つた書翰中にも「今朝神田孝平方へ參り其柳原にて買取りし時の事情を詳に致す積り其上にて直に認め可申候」と記してゐることでもわかる。柳原で見付けたと記憶してゐたら神田から本鄕湯島の聖堂裏だつたと聞いて、序文にはさう書いたのであらう。「鵲齋先生の親筆」云々も、この書は鵲齋先生の「著述」で大槻に贈つたものであるといふ意味か、或は福澤の筆の走りすぎか、神田の話の誇張かであつたらうと思ふ。それでなければ前記の數箇所の脫落誤記の說明がつかないのである。

それから初版本の「草稿を校正し」とある其の校正は、何を典據として校正したのであらうか。福澤本と初版本以後の流布本との間には無數の相違がある。前記のやうな重要な相違は、原典からの轉寫の粗漏と原典の不完全とが重なり合つたものと見るより外はないが、漢字と假名の相違、送り假名の有無などは、次節にその一部分の異同を表示しておくが、仔細に見ると、初版本は專ら讀み易からしめようとの配慮が拂はれてゐると見なければならぬ。果して福澤みづから筆を下したか、それとも杉田家に於て行はれたか、そこはよく分らぬけれども、草稿にかなり手を加へたものと思はれる節がある。

從つて從來發見されてゐる諸寫本にこの福澤本をも加えて比較校合することによつて、流布本の誤りを正し、玄白自筆の當初の姿に復元することが出來ると思ふ。そしてその事の一日も速かならんことを切望する次第である。

福澤本と異本との校合

幸にして、內山博士は、岩波本と初版本と、內山本「和蘭事始」と、小石本「蘭東事始」と、矢野本「蘭東事始」との精密な對校表を發表してゐる。洵に敬意を表すべき丹念な仕事である。いまその例に倣つて、岩波本と內山本と福澤本との冒頭一二頁の對校を試みて、拙稿を終りたいと思ふ。（前例に倣ひ、先づ岩波本の頁と行とを基準にして、三本を對照する。表中○印は岩波本に同じく、△印は內山本に同じきことを示す。但し兩書とも校訂者が「　」の中に挿んで入れた送り假名、それから句讀點、ならびに三書とも變體假名および外國語以外の片假名平假名の區別は問はないことにする。）

頁行	岩波本	内山本	福澤本
27・2	專ら行はれ	專ら行れ	△
27・3	昔し翁が輩	昔翁が輩	△
27・4	露思はざりし	露思ざりし	○
27・5	盛んになりし	盛になりし	△
27・5	漢學は遣唐使といふものを異朝へ遣はされ或は英邁の僧侶などを渡され	漢學は中古に遣唐使といふ者を異朝へ遣され或は英邁の僧侶を渡され	漢學ハ中古シ遣唐使といふものを異朝へ遣され或ハ英邁の僧侶などを渡され
27・6	從ひ學ばせ	從ひ學せ	△
27・7	盛んなりしは尤の事なり	盛なりしハ尤の事也	盛なりしハ尤の事なり
27・7	此蘭學は左樣の事にも非ず	此蘭學ばかりは左樣の事にもあらず	此蘭學ハ左樣の事にもあらず
27・8	かく成り行しは	かく成行しは	△
27・8	其教へ方總て	其教かた惣て	△
27・9	領會	○	「會」の字が「人」の下に「專」といふ字に作つてある。
27・10	覺居る故。	覺居る事故	覺居る事ゆへ

28・1	流布するものなるか	流布するなるか
28・1	形成を考るに	形勢を考るに
28・2	陽には交易陰には欲する所有て	陽には交易によせ陰には欲する所ありて
28・3	國初以來	國初已來
28・3	知る處	知る所
28・5	殘るも有り	殘るもあり
28・5	云ふなり	いふなり
28・6	御免有て	御免ありて
28・6	船を寄せぬ	船は來しぬ
28・6	異船御禁止	異船禁止
28・7	非る次第	あらざる次第
28・7	許され給へり	許され給ひぬ
28・8	逐ひ拂はれて	逐拂れて
28・9	夫よりは年〻	それよりは年々
28・9	來す事とは	來すこととハ
28・10	隨從し來レる	隨從し來る
18・11	是れ固より	これもとより

流布するものなるが	流布するものなるが	
形成を考るに	形勢を考ふるに	
陽には交易陰には欲する所ありて	陽には交易陰には欲する所ありて	
○	○	
○	○	
殘るもあり	殘るもあり	
△	△	
△	△	
○	○	
△	△	
△	△	
△	△	
それよりは年〻	それよりは年〻	
來すことハ	來すことハ	
△	△	
△	△	

28・12	讀て習ひ覺し事にも非ず只	讀て習覺しことにハあらず	讀て習覺しことにもあらず
	其手術を見習ひ	但其手術を見習	たゞ其手術を見習
28・12	書留たる迄なり	書留たるまでなり	△
29・1	尤もこなたになき所の	尤こなたに無き所の	△
29・1	代藥がちにてぞ	代藥がちなるを以て	△
29・1	取扱ひし事と知らる	取扱しことと知らる	△

以上は岩波文庫で冒頭の第一節二十二行分の對校に過ぎないが、この僅かな一例で、どんなに流布本と各種の寫本との間に誤差が多いかゞ察せられるであらう。勿論右の例の中には、漢字と假名の違ひ、送り假名の有無などの、內容に影響のないものが多いのであるが、福澤本が內山本に近く流布本に遠い所から察すれば、初版本の「校正」なるものが、或る程度原據の文字の使ひ方を讀み易くやはらげるための作爲をなしたと見ても誤りないであらう。

最後に、私は流布本「蘭學事始」の不備や缺陷ばかりを數へ立てゝ來たやうであるが、私は明治二年初版本刊行のための福澤の志を、これによつて低く評價しようと思ふ者ではない。この書の文化史的意義を最初に最も高く評價した者こそ實に福澤その人であつて、その故にこそ福澤はみづから資を投じてこの書の刊行を促したのであり、再版の序文に添えて長與專齋に贈つた書翰にも「實に此書は多年人を惱殺するものにして今日も之を認めながら獨り自から感に堪へず涙を揮ひ執筆致し候何卒再版は澤山にして國中に頒ち度存候」云々と記してゐるほどである。福澤のこの志があつたればこそ、この書が廣く後世の人々の目に觸れ、度々の重版を見るに至り、更に研究家をして、その內容について、そ

の成立について、根本的な精緻な研究業績を擧げさせるに至つたものであつて、福澤が神田孝平の寫本發見の功績を高く讃える以上に、我々は福澤の初版刊行の篤志を深く感謝するものである。福澤の刊行せしめた初版本の系統を引く流布本を批判し、別に各種の異本を比較校合して新たな決定版を作り上げることは、福澤の志を全うする所以であると私は信ずる。

附記 拙稿を草するに當つて、私は内山孝一博士校訂解説「和蘭事始」（昭和二十三年十二月、中央公論社刊）に負ふところが甚だ多い。茲に記して深く感謝の意を表する。

長與專齋宛書翰

餘白が出來たから、本文中に引用した福澤の手紙の全文を、茲に掲載しておく。明治二十三年日本醫學會で「蘭學事始」の再版を企てたとき、會長長與專齋からその序文を求められたので、これに答へた二通の書翰である。（句讀點は筆者がつけたものである。）

其一

昨日御手紙被下、未御返詞不仕中に、今朝も又々御使、實に恐縮不堪、彼の蘭學事始の一條、苟も出版とあれば念を入れ度、依て今朝神田孝平方へ參り、其柳原にて買取りし時の事情を詳に致す積り、其上にて直に認め可申候。時日の御間に合候樣必ず急ぎ候積り、實は昨日の雨天にて少々怠りし次第、あしからず御承引奉願候。頓首。

一日　　諭吉

長與樣　侍史

其二

蘭學事始の事に付、今日神田孝平氏を訪ひ、事實相分り候に付、唯今別紙認さし上候。尙御删正可被下候。實に此書は多年人を惱殺するものにして、今日も之を認めながら獨り自から感に堪へず、涙を揮ひ執筆致し候。何卒再版は澤山にして國中に頒ち度存候。右申上度、匆々頓首。

二十三年四月一日　　諭吉

長與先生　侍史

尙以從前の版本に、豐前中津奥平昌庶公とあるは、昌鹿の誤りに御座候。是れも乍序申上候。以上。

（富田正文記）